

サークル集団における対後輩行動の構造¹⁾

筑波大学大学院（博）心理学研究科 新井 洋輔

筑波大学心理学系 松井 豊

The structure of behavior toward *kouhai* (junior members) in university clubs

Yosuke Arai and Yutaka Matsui (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

This study seeks to examine the determinants of behavior toward *kouhai* (junior members) from *senpai* (senior members) in university clubs. In study 1, thirteen aspects of behavior (command and warning, planning, consideration, coaching, friendship, aggression and ignoring, conformity and suppression, avoiding hierarchy, cooperation, avoidance, exemplary, exercising authority, politeness) were identified. Study 2 surveyed 183 college students and obtained the following main findings: (1) The results of principle component analysis suggest that the thirteen aspects of behavior have a circumplex structure around the two orthogonal axes of Accept-Reject and Dominant-Non-dominant. (2) Although Reject and Dominative behaviors are relatively rare, Accept and Non-dominant behaviors are relatively frequent. (3) Gender differences were observed in some behavioral aspects. Males were found to be more Dominant than females, while females were more Non-dominant and Accepting than males.

Key words: interpersonal behavior, in-group behavior, behaviors toward junior members, clubs

本研究は、集団内の対人行動の中から、サークル集団において先輩から後輩に対して行われる行動（対後輩行動）をとりあげ、行動の生起頻度に基づいて側面に分類し、その側面間の相互関係を明らかにすることを目的とする。

サークル集団研究の重要性

新井・松井（2003）は、大学生の部活動・サークル集団に関する研究を概観している。この概観によれば、サークル集団への所属は、サークル集団本来の目的である、興味を満たし、技術を向上させる機能だけでなく、サークル集団で得られる友人関係や

先輩後輩関係によって対人関係的な機能（心理的支えとしての安定化の機能や、リーダーシップや社会規範の取得などの陶冶の機能）も果たしている。このように、大学生の部活動・サークル集団は、大学生活の充実感に時として学業以上に大きな役割を果たしている一方で、成員には集団を離れたいと思う機会も少なからずあり、対人関係に問題を感じている成員も少なくない。新井・松井（2003）は、このような問題の原因となる、サークル集団内の具体的な対人関係に関する研究が少ないことを、指摘している。

本研究では、この新井・松井（2003）の指摘にしたがって、大学生のサークル集団をとりあげ、サークル集団内に生起する対人関係に関する研究を行う。

1) 本論文は、2001年度・2002年度日本心理学会で発表したデータを再解析したものである。

研究にご協力いただいた、筑波大学人間総合科学研究科の高橋尚也・藤桂の両氏に感謝の意を表します。

対先輩行動に関する研究

サークル集団内の対人関係に関しては、新井(2000, 2001, 2002)が、先輩後輩関係に生起する行動のうち、後輩から先輩に対して生起する行動(対先輩行動)に関する検討を行っている。大学生を対象とした質問紙調査の結果、対先輩行動は、集団状況の要因や、集団内の2者関係の要因との関係の違いから、以下の6側面に分類された。すなわち、私生活でも先輩に積極的かつ親密に関わる「親交」、敬語など先輩に対して礼儀に基づいた行動をする「礼儀」、使い走りなど先輩から受けるコストの高い命令に従う「服従」、先輩を参考にして行動する「参照」、先輩に本音を言うのを避け表面的な関わりを持つ「衝突回避」、先輩の悪口を言うなどの「攻撃」である。対先輩行動の6側面それぞれの尺度得点を分析した結果、「親交」や「礼儀」はよく行われていたのに対し、「服従」や「衝突回避」はあまり行われておらず、「攻撃」はほとんど行われていなかった。性差を見ると、「礼儀」は女性の方が、「攻撃」は男性の方が、それぞれ多く行っていた。

新井(2000, 2001, 2002)で扱われている対先輩行動は、後輩から先輩への行動、すなわち先輩後輩関係における上方向の行動を検討している。サークル集団内の先輩後輩関係をより詳細に把握するためには、上方向のみならず、下方向に関する検討も必要である。そこで本研究では、新井(2000, 2001, 2002)では扱われていなかった、先輩から後輩に対して生起する行動(対後輩行動)をとりあげる。具体的には、対後輩行動の側面に関する尺度を作成し、各行動側面間の相互関係を検討することを第1の目的とする。さらに、新井(2000)において対先輩行動の生起に影響していた性別の要因や、集団の種類の要因(「体育会」か「その他の集団」か)の影響を検討することを第2の目的とする。

サークル集団と先輩後輩関係の性質

新井・松井(2003)によれば、大学生のサークル集団には、スポーツで勝つなどの明確な集団目的のために強い規則を定めたフォーマル集団に近い集団(いわゆる「体育会」)もあれば、趣味のための情報交換のみを目的としたような個人目的に基づくインフォーマル集団に近い集団もあると考えられる。

先輩後輩関係は、フォーマル集団におけるリーダー・フォロアーの関係のような上下関係側面から捉えることができるが、フォーマル集団としての性質の弱いサークル集団では、先輩後輩関係の上下関係の側面は弱く、水平関係の行動が生起していると

考えられる。実際に新井(2000, 2001)では、水平関係の行動である「親交」と、上下関係の行動である「礼儀」「服従」「衝突回避」が抽出され、上下関係の行動は集団がフォーマル集団に近いほど生起していた。このような多様な関係を含むサークル集団における先輩後輩関係を検討することで、従来の集団内の対人行動研究では明らかになっていない、上下関係があいまいな集団に特有な対人関係のあり方を把握することができると期待される。本研究では、このような性質を持つ先輩後輩関係の中から対後輩行動をとりあげ、検討を行う。

対後輩行動も、対先輩行動と同様に上下関係の行動と水平関係の行動の双方を含むと予測されるが、本研究では、対後輩行動の構造を整理するうえで、一般的対人行動の研究で得られている「親和－拒否」「支配－服従」の2軸を中心とした構造を参考にする。

一般的対人行動に関する研究

一般的対人行動に関する研究には、対人行動を理論的に分類した研究(斉藤, 1990)や、一般的他者に対する対人行動の構造を検討した研究(Wiggins, 1979; 水野, 1994など)がある。前者の理論的分類研究では、斉藤(1990)が、対人感情の分類結果にもとづいて、対人欲求と対人行動を概念的に整理した円環図を作成している。斉藤(1990)の円環図では、対人行動が、「支配－服従」「親和－拒否」の2軸からなる4つの象限に、原点を中心として円環状に配置されている。後者の現実場面の対人行動を分析した研究においても、対人行動が「支配－服従」「受容－拒否」の2軸(もしくはそれに類似した2軸)に、円環的に配置されるという知見が得られている(Foa, 1961; Schaefer, 1959など)。

Wiggins(1979)は、このような対人的次元に関わる個人特性について調査を行い、支配的・拒否的特性は男性に多く、服従的・受容的特性は女性に多く見られることを見出している。さらに水野(1994)は、Wiggins(1979)をもとに、日本における対人行動の構造の円環性と「支配－服従」「受容－拒否」の2軸の存在を確認する研究を行っている。水野(1994)は、他者に対して普段どのくらい対人行動をとっているかを調査している。その結果、対人行動は円環的に配置されたが、「支配－服従」の因子は再現されなかった。水野(1994)は、日本においては行動が円環構造を形成するものの、「支配－服従」「受容－拒否」の次元を形成しない可能性がある、と考察している。

斉藤(1990)やWiggins(1979)や水野(1994)

の研究は、一般的他者に対して行う行動を分析している。そのため、先輩後輩間の行動のような、集団内の特定の他者に対する行動では、集団内の役割に基づいた行動など、異なる行動側面が得られる可能性がある。また、一般的対人行動の研究で抽出された「支配－服従」行動を大学生のサークル集団における先輩後輩関係に適用してみると、先輩が服従的行動を行ったり、後輩が支配的行動を行ったりすることは、一般的ではない。したがって、この枠組みが対後輩行動の分類にそのまま適用可能ではないと考えられるが、行動の全体的側面を捉える際には参考になると期待される。

集団内の行動に関する研究

本研究で検討するサークル集団における対後輩行動は、新井（2000, 2001）の対先輩行動の各下位側面に対応した側面に分類できると予測される。また、対後輩行動に生起している具体的な行動の内容は、リーダーシップ研究などのフォーマル集団研究における下方向の行動や、親密化過程などのインフォーマル集団研究からすでに得られている行動側面に、類似している可能性がある。本研究では、対後輩行動の内容として、新井（2000, 2001）における対先輩行動とともに、対後輩行動の従来のフォーマル集団研究やインフォーマル集団研究から得られた行動内容を参考にする。

フォーマル集団における下方向の行動

フォーマル集団に関する研究は、集団目的を成就するために、効率よく集団が機能するための集団状況と集団成員のあり方を、中心的に検討している。たとえばリーダーシップ研究では、特定の個人（集団のリーダー）の集団成員に対する影響方略やその効果などが扱われている（白樫, 1985）。

三隅（1984）は、リーダーシップの機能を、課題志向的な行動パターン（P型：Performance）と、関係維持的な行動パターン（M型：Maintenance）の2次元から捉える「リーダーシップPM論」を提唱している。三隅・白樫・武田・篠原・関（1970）は、リーダーシップに関する質問項目を因子分析した結果から、規則の遵守や生産者の圧力に関する行動である「業績への圧力の因子（圧力P）」、相互信頼や個人的な問題への配慮に関する「集団維持の因子（M）」、仕事の計画や手順の明確化に関する「計画化の因子（計画P）」を見出している。

先にあげた一般的他者に対する対人行動に関する研究知見（斉藤, 1990）に照らすと、P型リーダーシップは、圧力をかけたり規則の遵守を求めたりす

る点で「支配」に、M型リーダーシップは対人関係の維持の点で「親和（受容）」に、それぞれ対応する行動であると考えられる。サークル集団における対後輩行動においても、これらの側面に類似した行動が生起している可能性がある。

対後輩行動と規定因との関係

本研究では、対後輩行動の頻度と、性別や集団の種類という規定因との関係を検討するが、これらの関係は新井（2000, 2001）の対先輩行動における知見に対応した結果が得られると予測される。

新井（2000, 2002）においては、「礼儀」「服従」という後輩に特徴的な行動が「集団フォーマル性の高い集団」に多く生起していたことから、とくに「体育会」などの、フォーマル集団に近いサークル集団においては、上下関係の側面が強調され、先輩後輩の役割に適合的な行動が強く求められると予想される。したがって、対後輩行動については、「体育会」においては支配的な行動が多く生起し、服従的な行動は少ないと予測される。

さらに、新井（2000）では「攻撃」が男性に多く見られたことや、先に述べたWiggins（1979）における結果から、支配的・拒否的行動は男性に多く、服従的・受容的行動は女性に多く生起すると予測される。

本研究の目的

本研究では、大学生のサークル集団における先輩から後輩に対して生起する行動（対後輩行動）を分類し、対後輩行動の側面間の相互関係を分析する。先行研究から導かれる仮説は、以下のとおりである。

仮説1：対後輩行動の側面間には、一般的他者に対する対人行動の構造における「親和－拒否」「支配－服従」に類似した、一定の構造がある。

仮説2：行動頻度の規定因として集団の種類が影響し、「体育会」集団では、支配的行動が多く、服従的行動が少なく生起している。

仮説3：性別も対後輩行動の頻度に影響し、支配的・拒否的行動は男性に多く、服従的・受容的行動は女性に多く見られる。

以上の目的と仮説にしたがって、2種の質問紙調査をおこなった。研究1では、対後輩行動の側面を探索的に抽出することを目的とした。研究2では、対後輩行動の側面間の構造を検討するとともに、「体育会」集団の特徴や性差についても検討することを目的とした。

研究 1

方法

茨城県内の国立T大学の学生85名（男性35名，女性50名）を対象に，質問紙調査を実施した．調査期間は2001年2月～3月で，実施時間は約20分であった．

質問紙 以下の質問紙において，1と2は全員に回答を求めたが，後輩のいない回答者については，3・4に回答せず，5に回答するように求めた．なお，1と2は単一回答方式，3は5件法（「5. あてはまる」～「1. あてはまらない」），4と5は自由記述形式で回答を求めた．

1. フェイスシート 学年・年齢・性別・所属する大学および学部．

2. 所属集団に関する情報 サークル・クラブ・同好会・体育会系運動部などの集団で，もっとも関わりの深い（深かった）集団について，「所属集団への所属期間」と「所属集団の種類」について尋ねた．所属期間は，「現在所属している」「以前所属していた」の中から，所属集団の種類は，「体育会系運動部」「スポーツの同好会」「文化・芸術系サークル」「その他」の中から，それぞれ回答を求めた．なお，集団に所属していない回答者については，これ以降の質問への回答を行わずに，質問紙を返却するように教示した．

3. 自分と後輩との関わり方 新井（2000，2001）の対先輩行動尺度を参考に，「後輩に対する行動」を問う項目を作成した．新井（2000，2001）の対先輩行動尺度の項目について，対象を「先輩」から「後輩」に置き換えて項目を作成したのち，後輩への行動として不適切な項目を削除し，対先輩行動尺度を基にした項目に若干の修正を加え（「後輩の指示にはすぐに対応する」を「後輩の頼みにはすぐに対応する」に修正）て，68項目を作成した．これらの項目について，「2. 所属集団に関する情報」で回答した集団内での，後輩に対する関わりを尋ねた（なお，対象となる後輩は特定していない）．

4. 所属集団の後輩との関わり 「その集団の活動時間内に，あなたは後輩とどのように関わっていますか（いましたか）」などの質問文で，活動時間中および活動時間外における所属集団の後輩との関わりについて，具体的な行動を自由記述形式で回答を求めた．

5. 所属集団の先輩との関わり 「その集団の活動時間内に，先輩はあなたに対してどのように接してきますか（きましたか）」などの質問で，4と同様に先輩から自分への関わりについて尋ねた．

なお，この調査では年功序列に対する態度を測定する尺度も含まれていたが，本論では省略する．

結果

所属集団の種類 所属集団については，「体育会系運動部」が12.9%，その他の集団があわせて87.1%であった．

対後輩行動項目の因子分析 自分と後輩との関わり方に関する68項目に関して，因子分析（主成分分解，プロマックス回転）を行った．その結果，因子の解釈可能性から5因子が抽出された．いずれの因子にも.40以上の負荷を持たなかった項目を削除し，すべての項目がいずれかの因子に.40以上の負荷を持つまで，繰り返し上記の方法で解析した．最終的な結果をTable 1に示す．各因子の回転前の寄与率は，第1因子が15.0%，第2因子が12.5%，第3因子が9.9%，第4因子が6.7%，第5因子が4.7%で，5因子による累積寄与率は48.9%であった．

第1因子に負荷の高い項目は，「後輩に話しかけられても相手にしないことがある」「後輩に嫌がらせをすることがある」などであったため，この因子を，後輩から関わりを求められても相手になかったり，後輩に対して攻撃的に振舞ったりする行動であると解釈し，“攻撃・無視”と命名した．第2因子に負荷の高い項目は，「後輩とは普段から親しくしている」「後輩とは積極的につきあう」などであったため，この因子を，後輩に積極的に親しく関わり，私生活でも関わりを持つ行動であると解釈し，“親交”と名づけた．第3因子に負荷の高い項目は，「後輩に悪く思われないように本音と違うことを言う」「後輩に不愉快なことをされても黙っている」などであったため，この因子は，後輩の意見に表面的に同調し，衝突を避けるため自分を抑える行動であると解釈し，“同調・抑制”と名づけた．第4因子に負荷の高い項目は，「後輩には自分と接するときにあまり礼儀に気を使って欲しくない」「後輩からは教えられることが多い」などであったため，この因子を，後輩に対して上下関係を作らないように気を使い，対等な関係を築こうとする行動と解釈し，“上下回避”と名づけた．第5因子に負荷の高い項目は，「後輩の仕事を後輩の代わりにする」「後輩といるときは仕事を率先してやる」などであったため，後輩に対して仕事の肩代わりなどコストの高い行動をする因子であると解釈し，この因子を“助力”と命名した．

各因子の因子間相関（Table 1）は，第2因子（親交）と第5因子（助力）に中程度の正の相関（ $r = .46$ ）が見られたほかは，強い相関は見られな

Table 1 後輩に対する関わり方の最終的な因子分析結果（主成分分解，プロマックス回転後）

項目内容	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	共通性
後輩に話し掛けられても相手にしないことがある	.783	-.097	-.055	.142	-.138	.38
後輩が声をかけてきても、冷たくあしらうことがある	.773	-.096	-.057	.110	-.218	.66
後輩の問いかけに応じないことがある	.717	-.089	.047	.074	-.210	.49
後輩の仕事の邪魔をすることがある	.691	.177	-.063	.135	-.243	.44
後輩に文句を言うことが多い	.650	-.070	-.064	-.026	.337	.44
後輩に嫌がらせをすることがある	.647	.215	-.026	.170	.079	.50
後輩の失敗を責めることがある	.627	.063	.012	-.282	.116	.48
後輩に誘いを断られると腹が立つ	.577	.156	.301	-.192	-.131	.49
後輩に話し掛けられたら必ず反応を返す	-.563	.383	.039	.025	.233	.48
後輩の悪口を言うことが多い	.540	.174	.225	-.297	.020	.52
後輩に自分の命令に従うように要求する	.523	.006	-.040	-.427	.216	.48
後輩に自分の仕事の肩代わりを要求する	.481	.124	.022	-.131	.229	.38
後輩とは顔を合わせないようにしている	.469	-.366	.212	.081	-.045	.46
後輩が失礼なことをすると許せない	.426	.048	.059	-.516	.141	.29
後輩にはきちんとした態度で接する	-.420	-.072	.147	-.010	.559	.38
後輩とは普段から親しくしている	.020	.858	.089	-.106	-.118	.66
後輩と個人的に遊びに行ったりする	.201	.759	.030	-.016	-.076	.50
後輩とは私生活でもつきあう	.179	.755	.075	-.005	.037	.45
後輩と積極的に関わる	.093	.734	.065	-.049	-.049	.63
後輩をお昼や飲み会に誘う	.048	.665	-.125	-.028	-.181	.45
後輩とは個人的な話もする	-.096	.663	-.121	.070	.020	.40
後輩の個人的な相談に乗る	-.027	.656	-.030	.017	.061	.55
後輩とはある程度の距離をおくようにしている	.215	-.630	-.091	.025	.091	.40
後輩と一緒にいると落ち着く	.122	.540	-.110	.281	.063	.49
後輩に個人的な相談に乗ってもらう	-.024	.485	.193	.313	-.129	.45
後輩から指摘されたことは参考になる	-.177	.430	.096	.296	.132	.53
後輩には敬語を使う	.136	-.410	.104	.402	.171	.57
後輩に悪く思われないように本音と違うことを言う	.244	-.036	.763	-.139	.127	.57
後輩には不愉快なことをされても黙っている	-.383	.072	.689	-.228	.052	.52
後輩といるときは控えめに行動する	-.009	-.254	.631	.123	.026	.34
後輩の機嫌を損なわないように気を使う	.077	.176	.616	-.081	.116	.69
後輩の考えに本心では賛成していなくても、賛成を示す	.281	-.023	.574	.042	-.070	.53
後輩と意見が食い違ったら譲る	-.001	-.120	.496	.391	.079	.62
後輩のセンス（服装、インテリアなど）を参考にする	.007	.206	.471	.440	-.009	.47
気がつくとき後輩に似た行動をしていることがある	.321	.306	.469	.138	-.018	.38
同時に何かするときには後輩に順番を譲る	-.164	-.059	.466	.438	.202	.59
後輩との会話が途切れないようにする	-.129	.224	.465	.155	.069	.47
後輩の冗談には、面白くなくても笑ってあげる	.023	-.110	.458	.073	.375	.54
後輩に技術的な指導をする	.008	.194	-.456	-.055	.423	.33
後輩には自分の意見を言わない	-.114	-.354	.448	-.274	-.107	.54
後輩には自分と接するとき、あまり礼儀に気を使ってほしくない	-.002	.104	.005	.678	-.261	.42
後輩のような考え方をすることがある	-.101	.112	.040	.608	.127	.50
後輩からは、教えられることが多い	.008	.193	-.088	.594	.256	.32
後輩には敬語を使わせる	.304	.024	-.006	-.573	.372	.53
後輩に敬語を使わなくていいといたりする	.092	-.079	.013	.568	.013	.55
後輩の作業を肩代わりしてあげる	.194	.037	-.294	.505	.357	.61
後輩の荷物を持つ	.243	.056	.175	.475	.360	.51
後輩の仕事を後輩の代わりにする	.181	-.354	.028	.253	.718	.51
後輩の模範になるように行動する	-.094	.122	.041	-.272	.645	.52
後輩といるときは仕事を率先してやる	-.077	-.147	.223	.063	.633	.38
後輩に頼まれたら雑用も引き受ける	-.121	.065	.182	.224	.584	.40
後輩の頼みにはすぐに対応する	-.041	.229	-.020	-.060	.564	.53
後輩から「先輩らしくしてほしい」という期待をされると困る	.329	.042	.096	.298	-.472	.55
回転後の負荷量平方和	6.637	7.079	4.743	4.903	5.218	
因子間相関	因子1	.08	.09	-.05	.09	
	因子2		.00	.10	.46	
	因子3			.13	-.03	
	因子4				-.01	

かった。

対後輩行動に関する自由記述回答の分析 因子分析でいずれの因子にも負荷しなかった項目と、自由記述の結果から得られた後輩に対する行動とをまとめ、KJ法(川喜多, 1967)を援用して、著者が13カテゴリーを設定した。その後、このカテゴリーに基づいて2名の協力者(心理学を研究する大学院生)による分類を行った。分類の結果、一致率は78.8%であったため、一致していなかった項目については両名で話し合いを行い、最終的にすべての項目がいずれかのカテゴリーに分類された。今後はこの13カテゴリーを、対後輩行動の下位側面として扱うこととした。

13側面中5側面は、因子分析の結果から得られたものであり、それ以外の側面は、8側面にまとめられた(側面名と、項目の代表例をTable 2に示す)。すなわち、集団目的のために後輩に対して指示・命令する「命令・注意」、集団の計画を立案し、後輩に伝達する「計画」、後輩の集団内の対人関係に注意を向け、順応できるように気を配る「配慮」、集団内において後輩に作業や技術に関して持っている情報を提供することで、後輩が集団内に順応できる

Table 2 自由記述に基づく分類と項目例

命令・注意
やるべきことについて後輩に指示を出す
集団内の行動について後輩を注意する
計画
サークルの行事について連絡する
サークル活動の計画を立てる
配慮
後輩が集団になじんでいるか気を配る
みんなでいるとき場を和ませようとする
指導
後輩に練習指導・技術指導をする
後輩に足りないところを教える
回避
できるだけ後輩と接点を持たない
後輩とは必要なことだけ話す
模範
先輩として尊敬されるように振舞う
落ち込んだり悩んだりしても表に出さない
権力行使
ジュースを買いに行かせる
勝手に決まりを作って守らせる
譲歩・穏和
後輩の意見や話を尊重する
後輩には笑顔で接する

ように関わる「指導」、集団の内外で後輩との接点そのものを避ける「回避」、後輩の目を意識して模範的に行動する「模範」、先輩としての権力を利用し、後輩にさまざまな要求をする「権力行使」、後輩を優先し、後輩の意見を尊重、受容する行動である「譲歩・穏和」の8側面である。

考察

研究1では13の対後輩行動側面が見出された。「命令・注意」「計画」「配慮」「指導」の4つの側面は、集団における先輩の役割に強く関連した行動であり、従来のリーダーシップ研究の分野で扱われてきた側面であると考えられる。三隅(1984)のリーダーシップに関する研究と対照すると、圧力Pは「命令・注意」に、計画Pは「計画」に、Mは「配慮」にそれぞれ対応した概念であると考えられる。

残りの8つの側面(「攻撃・無視」「親交」「同調・抑制」「上下回避」「助力」「回避」「模範」「権力行使」「譲歩・穏和」)は、サークル集団における先輩の役割との関連が弱い行動や、サークル集団外の場合における行動であると考えられる。

研究2

目的

研究1で見出された対後輩行動の13下位側面に關して、側面間の構造を検討するとともに、行動頻度と、集団の種類や性差との関係について検討することを目的とする。

方法

茨城県内の国立T大学の学生183名(男性80名、女性102名、不明1名)を対象に、質問紙調査を実施した。調査期間は2001年6月～7月で、回答時間は約15分であった。

質問紙 以下の質問紙では、1～3については単一回答方式で、4は研究1と同一の5件法で、それぞれ尋ねた。

1. **フェイスシート** 学年・年齢・性別・所属する大学および学部。

2. **所属集団の種類と後輩の属性** 第1研究と同一。

3. **所属集団の後輩の属性** 2で回答した集団の中で、「よく知っている後輩」一人を思い浮かべるように教示し、その後輩の学年・年齢・性別について回答を求めた。

4. **対後輩行動尺度** 「命令・注意」「計画」「配慮」の3尺度については、研究1の自由記述の結果得ら

れた項目のほか、三隅（1984）のリーダーシップ理論における圧力 P、計画 P、M の尺度項目を、それぞれ参考にして作成した。他の10側面については、研究1の因子分析と自由記述の結果をもとに尺度を作成した。項目内容は Table 3～Table 6を参照。

結果

所属集団の種類 所属集団については、「体育会系運動部」が19.0%、その他の集団があわせて81.0%であった。

対後輩行動尺度の尺度作成 研究2で用いる13尺度は、回答を研究1と同様に得点化した後、主成分分析によって1次元性の確認を行った。

解析の結果、「同調・抑制」「権力行使」「助力」「譲歩・穏和」の4尺度については、第1主成分への負荷量が.40に満たない項目があったため、それらの項目を除いて再度主成分分析を行った。その結果、尺度の項目すべてが第1主成分に.40以上に負荷したため、これらの尺度は1次元構造であると解

釈された。主成分分析の結果を Table 3～Table 6に示す。

さらに、対後輩行動の各尺度について、Table 3～Table 6に示す項目を回答の方向にあわせて加算し、合計得点を項目数で割って得点化した。Table 7には、各尺度の項目数、主成分分析における寄与率、尺度得点の平均値、 α 係数を示す。13尺度の α 係数については「権力行使」「模範」「上下回避」「譲歩・穏和」の α 係数が.60とやや低めであるが、他の側面はすべて.70を超えており、十分な信頼性があると判断した。

各尺度の平均値について、理論的中間値（3.0）と比較するt検定を行った。その結果、「命令・注意」「攻撃・無視」「同調・抑制」「権力行使」「助力」「回避」が3.0より有意に低く、「配慮」「指導」「模範」「上下回避」「譲歩・穏和」が3.0より有意に高かった（すべて $p < .01$ 。各尺度の平均値は Table 7参照）。

「体育会」の特徴 対後輩行動の各尺度について、

Table 3 各尺度の項目内容・主成分負荷量・平均値

命令・注意	負荷量	平均値
後輩に集団での練習をするよう厳しく言う	.791	1.94
集団内での後輩のミスや怠惰を注意する	.804	2.64
集団への遅刻や欠席について注意をする	.848	2.59
集団の規則を守るよう注意する	.793	2.79
集団の仕事や役割をするよう厳しく言う	.878	2.30
練習や活動について、後輩に命令する	.781	2.27
固有値	4.002	
計画	負荷量	平均値
集団に関する連絡事項を後輩に知らせる	.638	3.63
集団の1日の活動計画を知らせる	.711	2.70
集団のことについて、後輩の意見を聞いて方針を決める	.589	3.41
集団の仕事の段取りやわりふりを決める	.830	3.15
集団の目標達成のための計画を綿密に立てている	.767	2.48
集団の練習計画や活動方針などの計画を立て、後輩をリードする	.761	2.85
メンバー個人に適した仕事の割り振りを考える	.749	3.03
固有値	3.676	
配慮	負荷量	平均値
集団で後輩が気を使わないように配慮する	.592	3.43
集団内の活動で後輩がミスをしたときは、かばってあげる	.719	3.33
集団内の作業について、後輩が困っていないか気を配る	.757	3.86
集団内の人間関係などについて、後輩の相談に乗る	.602	3.59
集団内のもめごとがあると、まとめ役になる	.600	2.67
集団のことについて、後輩が気軽に話せるような雰囲気を作る	.654	3.88
集団の作業や練習について、うまくいかない後輩を励ます	.698	3.82
集団の雰囲気がよくないときは、冗談などで場を和ます	.658	3.45
固有値	3.511	

Table 4 各尺度の項目内容・主成分負荷量・平均値

指導	負荷量	平均値
集団内ではその後輩の模範となるよう行動する	.560	3.24
集団内で果たすべき役割について後輩に教える	.769	3.35
集団内で必要とされる技術が後輩に足りないときは、教える	.797	3.88
集団内で守るべき規則について後輩に教える	.799	3.63
集団内の技術について、後輩に手本を見せる	.704	3.45
集団内の仕事のこなし方について、後輩に教える	.820	3.62
集団内で必要とされる知識が後輩に足りないときは、教える	.772	3.86
固有値	3.943	
攻撃・無視	負荷量	平均値
後輩に嫌がらせをすることがある	.532	1.70
後輩の失敗を責めることがある	.634	2.17
後輩の悪口を言うことが多い	.593	1.89
後輩に話し掛けられても相手にしないことがある	.743	1.66
後輩の頼みを聞かないことがある	.583	2.55
後輩が声をかけてきても、冷たくあしらうことがある	.743	1.84
後輩の仕事の邪魔をすることがある	.690	1.77
後輩の問いかけに応じないことがある	.687	1.83
後輩と口をきかないことがある	.589	1.79
後輩に文句を言うことが多い	.605	2.05
固有値	4.142	
親交	負荷量	平均値
後輩と一緒にいると落ち着く	.670	2.64
後輩と個人的に遊びに行ったりする	.800	2.54
後輩に頼み事をすることが多い	.565	2.27
後輩の個人的な相談に乗る	.727	3.38
後輩と積極的に関わる	.701	3.19
後輩に個人的な相談に乗ってもらう	.593	1.97
後輩をお昼や飲み会に誘う	.679	2.95
後輩とは個人的な話もする	.700	3.53
後輩とは私生活でもつきあう	.776	3.11
後輩とは普段から親しくしている	.786	3.31
固有値	4.951	

所属集団間に差が見られるかを検討するため、t検定を行った。集団は、「体育会系運動部」と、「その他の集団」（「スポーツの同好会」「文化系サークル」「その他」）とで2群に分けた。「命令・注意」は、「体育会系運動部」のほうがその他の集団よりも有意に多く行っていた。「上下回避」「譲歩・穏和」は、「体育会系運動部」よりも「その他の集団」が有意に多く行っていた（「命令・注意」と「上下回避」は $p < .01$ 、「譲歩・穏和」は $p < .05$ 。有意差の見られたもののみ Table 8に示す）。

対後輩行動の性差 対後輩行動の各尺度について性差の検定を行った。「命令・注意」（ $p < .05$ ）「攻撃・無視」（ $p < .01$ ）「助力」（ $p < .05$ ）「権力行使」

（ $p < .01$ ）は、男性のほうが女性よりも有意に多く行っていた。「譲歩・穏和」のみ、女性の方が男性よりも有意に多く行っていた（ $p < .01$ ）。有意差の見られたもののみ Table 9に示す。

対後輩行動の構造 対後輩行動の下位側面の相互関係を検討するため、対後輩行動の13尺度の尺度得点に対して、主成分分析を行った（Table 10）。

解析の結果、固有値は成分1が3.87、成分2が2.29であり、成分2までの累積寄与率は、47.3%であった。成分1の負荷量を横軸、成分2の負荷量を縦軸とした2次元平面上に、13尺度を布置した結果が、Fig. 1である。

Table 5 各尺度の項目内容・主成分負荷量・平均値

同調・抑制	負荷量	平均値
後輩に悪く思われないように本音と違うことを言う	.575	2.63
後輩の意見には必ず同調する	.580	2.01
後輩の冗談には、面白くなくても笑ってあげる	.580	2.70
後輩といるときは控えめに行動する	.505	2.25
後輩には不愉快なことをされても黙っている	.607	2.42
後輩の考えに本心では賛成していなくても、賛成を示す	.682	2.11
後輩には自分の意見を言わない	.593	1.90
後輩の機嫌を損なわないように気を使う	.594	2.51
固有値	2.795	
上下回避	負荷量	平均値
後輩から「先輩らしくしてほしい」という期待をされると困る	.599	3.13
後輩に敬語を使わなくていいといたりする	.718	2.92
後輩に上からものを言わないように気をつけている	.589	3.33
後輩には自分と接するときに、あまり礼儀に気を使ってほしくない	.836	3.37
固有値	1.919	
助力	負荷量	平均値
後輩の頼みにはすぐに対応する	.459	3.47
後輩の作業を肩代わりしてあげる	.728	2.46
無意味に思えても後輩の頼みを聞く	.621	2.91
後輩に頼まれたら雑用も引き受ける	.770	2.68
後輩の仕事を後輩の代わりにする	.695	2.10
後輩の荷物を持つ	.460	1.65
固有値	2.414	
回避	負荷量	平均値
後輩とは顔を合わせないようにしている	.709	1.71
後輩とは集団以外の場所では関わらない	.766	2.25
後輩とは集団内でも関わらないようにしている	.746	1.55
集団以外の場所で後輩に頼られたくない	.491	1.96
後輩とのかかわりはサークルの間だけにとどめる	.827	2.25
面倒なので後輩とは関わらない	.804	1.71
固有値	3.218	

考 察

本研究の第1の目的は、先輩から後輩に対して生起する行動（対後輩行動）を分類し、側面間の相互関係を分析することであった。

以下では、研究2で得られた Fig. 1の結果を中心に考察する（以下では、「」が行動側面を、『』が行動側面のまとめられた領域を表す）。

対後輩行動の構造

右上の領域には、積極的に親しく関わる「親交」と集団に後輩が順応できるように気を配る「配慮」とが含まれることから『親和』的行動と解釈され、左下の領域は、後輩との接点を避ける「回避」が含まれることから『拒否』的行動と解釈される。ま

た、右下の領域は、権力を利用しさまざまな要求をする「権力行使」と指示・命令する「命令・注意」が含まれることから『支配』的行動と解釈され、左上の領域は、対等な関係を築こうとする「上下回避」が含まれることから『非支配』的行動と解釈される。以上の解釈を Fig. 1に加えたものを Fig. 2に示す。

Fig. 2では、「親交」「配慮」と「回避」とが『親和—拒否』の軸をなし、「権力行使」「命令・注意」と「上下回避」とが『支配—非支配』の軸をなすと解釈した（Fig. 2中矢印）。この2つの軸を中心に解釈すると、「計画」「指導」「助力」は良好な関係を築きながら後輩をコントロールする行動であるという点から、親和的かつ支配的な行動である『支

Table 6 各尺度の項目内容・主成分負荷量・平均値

模範	負荷量	平均値
後輩とは失礼の無いように接する	.684	3.15
後輩といるときは仕事を率先してやる	.670	3.03
後輩の目を意識して行動する	.530	3.00
後輩にはきちんとした態度で接する	.669	3.38
後輩の模範になるように行動する	.633	3.18
固有値	2.044	
権力行使	負荷量	平均値
後輩に自分の仕事の肩代わりを要求する	.669	1.90
後輩には敬語を使わせる	.525	2.21
後輩に自分の命令に従うように要求する	.827	1.71
後輩には個人的な仕事も要求する	.630	2.06
後輩に誘いを断られると腹が立つ	.478	1.94
固有値	2.033	
譲歩・穏和	負荷量	平均値
会話の内容は後輩に合わせる	.432	3.22
後輩の批判をしない	.580	3.14
後輩には必ず挨拶をする	.513	3.85
後輩との会話が途切れないようにする	.571	3.29
後輩と意見が食い違ったら譲る	.636	2.60
同時に何かするときには後輩に順番を譲る	.753	2.93
固有値	2.085	

Table 7 各尺度の基本情報と主成分分析における寄与率

尺度名	項目数	平均値	α 係数	寄与率(%)
命令・注意	6	2.42	.90	66.7
計画	7	3.04	.85	52.5
配慮	8	3.50	.81	43.9
指導	7	3.58	.86	56.3
攻撃・無視	10	1.92	.84	41.4
親交	10	2.89	.88	49.5
同調・抑制	8	2.32	.73	34.9
上下回避	4	3.19	.62	48.0
助力	6	2.54	.70	40.2
回避	6	1.91	.82	53.6
模範	5	3.15	.63	40.9
権力行使	5	1.96	.60	40.6
譲歩・穏和	6	3.17	.62	34.8

援』の行動と位置づけられる。「譲歩・穏和」は、後輩の意見を尊重しながら良好な関係を築いており、親和的で非支配的な『受容』の行動であると解釈される。『受容』の対極に位置づけられている「攻撃・無視」は、後輩に対して「失敗を責める」など支配的であると同時に「相手にしない」など拒否的な行動を含む『攻撃』の行動であると解釈され

る。表面的な同調によって積極的に関わらない「同調・抑制」は、中心からやや『拒否』のほうに近く位置し、やや拒否的であるが積極的な回避をしない行動と解釈される。『模範』は『支援』や「権力行使」の中間に位置するが、後輩の目を意識しながら積極的な支配をしない点で、『支援』や「権力行使」が行われていないときの行動と解釈される。以上のように、対後輩行動は、大きく『親和－拒否』と『支配－非支配』の2つの軸を中心に解釈できる。

このように、仮説1で予測された通り、対後輩行動には2軸を中心とした構造が見出された。ただし、この構造は『親和－拒否』と『支配－非支配』の2軸を中心としており、『支配』の対極は『服従』ではなく『非支配』が位置づけられた。以上の解釈を模式的に表した図をFig. 3に示す。

各行動頻度の性差と集団差 本研究の第2の目的は、集団の種類や性差と、対後輩行動の生起頻度との関係を検討することであった。

まず、対後輩行動の生起頻度の全体傾向を見ると、対後輩行動13尺度の得点の平均値と理論的中間点との比較結果から、本研究の回答者は、サークル集団の後輩に対して「命令・注意」「攻撃・無視」「回避」「助力」「権力行使」「同調・抑制」を少なく、「配慮」「指導」「上下回避」「譲歩・穏和」「模

Table 8 集団差に関する t 検定の結果

尺度	集団	N	平均	SD	F 値 (df)	t 値 (df)
命令・注意	体育会	30	2.85	1.04	1.289	2.774**
	他集団	125	2.32	0.91	(29, 124)	(153)
上下回避	体育会	29	2.81	0.81	1.017	2.807**
	他集団	124	3.27	0.80	(28, 123)	(151)
譲歩・穏和	体育会	28	2.95	0.56	1.107	2.260*
	他集団	124	3.22	0.59	(123, 27)	(150)

**p < .01

Table 9 性差に関する t 検定の結果

尺度	性	N	平均	SD	F 値 (df)	t 値 (df)
命令・注意	男	72	2.60	0.87	1.289	2.363*
	女	82	2.24	0.99	(81, 71)	(152)
攻撃・無視	男	72	2.18	0.61	1.583	5.522**
	女	81	1.69	0.48	(71, 80)	(151)
助力	男	72	2.66	0.56	1.216	2.532*
	女	80	2.42	0.61	(79, 71)	(150)
権力行使	男	72	2.15	0.65	1.341	3.620**
	女	81	1.80	0.56	(71, 80)	(151)
譲歩・穏和	男	72	2.99	0.53	1.207	3.943**
	女	79	3.35	0.59	(78, 71)	(149)

*p < .05, **p < .01

Table 10 対後輩行動13側面に関する主成分分析結果

行動側面	成分 1	成分 2
命令・注意	.759	-.380
計画	.793	.185
配慮	.745	.467
指導	.787	.092
攻撃・無視	.370	-.696
親交	.606	.361
同調・抑制	.152	-.237
上下回避	-.125	.422
助力	.553	.058
回避	-.253	-.611
模範	.361	-.119
権力行使	.655	-.556
譲歩・穏和	.121	.578
固有値	3.865	2.288
累積寄与率(%)	29.7	47.3

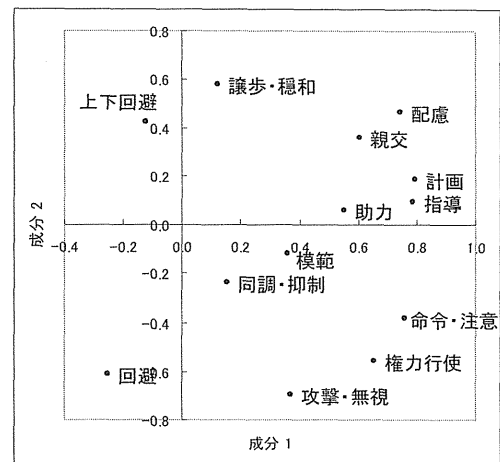


Fig. 1 対後輩行動側面の主成分負荷量によるプロット

範」を多く行っていた。この結果を Fig. 2 と対応させて捉えれば、『拒否』的行動や『支配』的行動はあまり行われていないのに対し、『親和』的行動や『非支配』的行動は多く行われているとまとめられ

る。

また、「体育会」と「その他の集団」との比較結果から、「体育会」では「その他の集団」に比べ、「命令・注意」が多く、「上下回避」「譲歩・穏和」が少なく行われていた。Fig. 2では、「命令・注意」

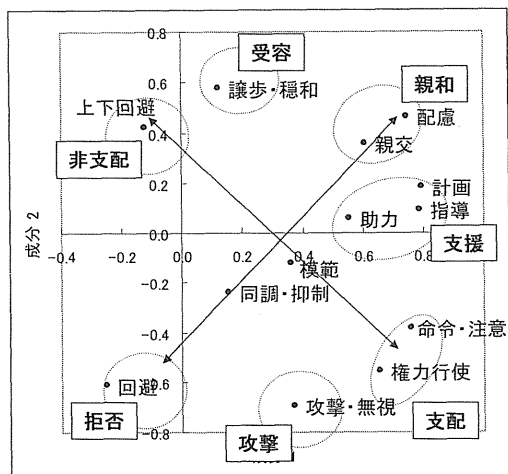


Fig. 2 対後輩行動側面の構造
※プロットは行動側面，□は行動側面群の解釈を示す。

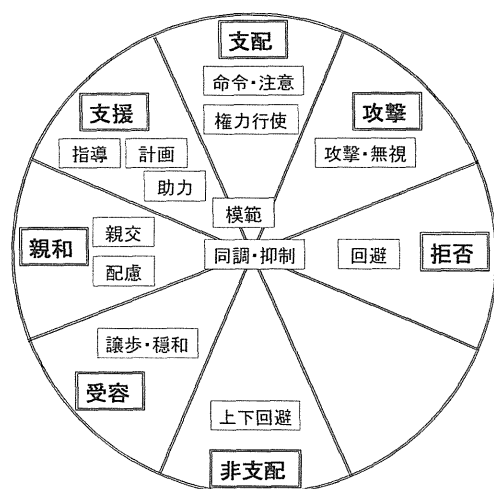


Fig. 3 主成分分析結果に基づくモデル図
※□は行動側面，▣は行動側面群の解釈を示す。

は『支配』行動であり、「上下回避」は『非支配』行動に位置している。この結果から、仮説2で予測されたとおり、「体育会」においては、先輩に上位者らしく（支配的行動を多く、非支配的行動を少なく）振舞うことが強く求められていると考えられる。

行動側面の性差に関しては、「命令・注意」「攻撃・無視」「助力」「権力行使」は、女性よりも男性のほうが、「譲歩・穏和」は男性よりも女性のほう

が、有意に多く行っていた。男性が多く生起させていた行動は、Fig. 2で見ると、『支配』的行動と、支配の意味をふくむ中間的な行動であり、女性が多く行っていたのは『非支配』と『親和』の中間的な行動である。Wiggins (1979) では、支配的・拒否的特性は男性に高く、服従的・受容的（親和的）特性は女性に高いという知見が得られているが、本研究の結果は、これにほぼ整合している。したがって仮説3は一部支持された。大学生の対後輩行動においては、性差はとくに『支配-非支配』の軸において強く現れ、『親和-拒否』の軸においてはほとんど差がないと解釈される。

先行研究との比較 Fig. 2のうち、三隅(1984)に関連した行動に着目すると、Mに対応する「配慮」、計画Pに対応する「計画」、压力Pに対応する「命令・注意」は、それぞれ『親和』『支援』『支配』行動として位置づけられた。この結果から、上位者から下位者への行動のうち、『支配』『親和』行動とその中間的な行動が、上位者に望ましい行動としてリーダーシップ研究などで扱われており、反対に『非支配』『拒否』的行動は望ましくない行動として扱われてきたと考えられる。

一般的他者に対する対人行動は、先行研究において『親和-拒否』と『支配-服従』の2軸によって整理されてきた。本研究で見出された2つの軸は、概念的には先行研究に類似しており、斉藤(1990)らの対人行動に関する知見が集団内の対人行動にもあてはまることが確かめられた。しかし、本研究の結果では、『支配』の対極には『服従』ではなく『非支配』が位置づけられた。本研究で扱った大学生のサークル集団においては、先輩にゆるやかな役割が与えられることによって「上位者としての役割を避ける行動」が起きているため、このような結果が得られたと考えられる。「役割を避ける行動」は、フォーマル集団における対人関係にくらべて役割のあいまいな、先輩後輩関係という対人関係のもつ特徴であると考えられる。さらに生起頻度に注目すると、『非支配』行動は、『支配』行動よりも多く生起していた。これは、先輩が必ずしも上位者として後輩を統制する役割を望んでいない可能性を示唆している。

本研究では、『支配-非支配』『親和-拒否』の2つの軸によって整理することで、従来扱われてきた集団内の行動を整理するとともに、従来のフォーマル集団-インフォーマル集団の枠組みでは整理できない、中間的な行動の位置づけを明確にすることが可能になった。たとえば三隅(1984)における計画P(本研究の「計画」に対応)は、『支配』行動で

ある圧力P（「命令・注意」に対応）と近い概念として位置づけられていたが、本研究の結果では、『支配』と『親和』の中間的な行動として整理された。同様に、「攻撃」や「譲歩・穏和」などの中間的な側面は、集団内の行動を2軸で整理したことによって、はじめて他の行動側面との相対的な関係が明らかになったといえる。

以上の対後輩行動に関する分析結果は、一般的対人行動を援用した『支配-非支配』『親和-拒否』の2軸による捉え方を用いることで、従来の集団研究で扱われてきた対人行動を網羅し、統合的に扱える可能性を示唆している。これまで集団内の2者間行動は、2者の親密な関係性に影響する行動や、集団内の役割に関連した行動に限定されて扱われてきたが、2軸を中心に平面で解釈することによって、集団内の対人行動の多様な側面を同時に把握することが可能になった。この枠組みによって行動側面の相互関係を検討すれば、集団内に役割に関連した行動が親密な関係性に及ぼす影響を明らかにすることができる。また、その逆に親密な関係性における行動が集団内の役割関係において持つ意味も検討できる。

本研究の課題 新井（2000, 2002）では、集団状況の要因や集団内の2者関係の要因が、服従的行動の生起に影響していることが明らかになっているため、対後輩行動においても同様の影響が見られることが予測される。今後、先輩という上位者においても同様の影響が見られるか研究を行うことが必要である。

引用文献

- 新井洋輔 2000 セミフォーマル集団における上下関係（1）-サークル集団における対先輩行動- 日本社会心理学会第41回大会発表論文集, 180-181.
- 新井洋輔 2001 サークル集団における対先輩行動と親密さ -セミフォーマル集団における上下関係（3）- 日本社会心理学会第42回大会発表論文集, 388-389.
- 新井洋輔 2002 サークル集団における対先輩行動と規定因の影響 -セミフォーマル集団における上下関係（4）- 日本社会心理学会第43回大会発表論文集, 686-687.
- 新井洋輔・松井 豊 2003 大学生のクラブ・サークル集団の研究動向 筑波大学心理学紀要, 26, 95-105.
- Foa, U.G. 1961 Convergences in the analysis of the structure of interpersonal behavior. *Psychological Review*, 68, 341-353.
- 川喜多二郎 1967 発想法 中央公論新書.
- 三隅二不二 1984 リーダーシップ行動の科学-改訂版- 有斐閣.
- 三隅二不二・白樫三四郎・武田忠輔・篠原弘章・関 文恭 1970 組織におけるリーダーシップの研究 年報社会心理学, 11, 63-90.
- 水野邦夫 1994 対人行動の構造の円環性の検討と機能的柔軟性指標（FFI）の作成 社会心理学研究, 10, 114-122.
- 斉藤 勇 1990 対人感情の心理学 誠信書房.
- Schaefer, E.S. 1959 A circumplex model for maternal behavior. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 59, 226-235.
- 白樫三四郎 1985 リーダーシップの心理学 有斐閣.
- Wiggins, J.S. 1979 A Psychological Taxonomy of Trait-Descriptive Terms: The Interpersonal Domain. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 395-412.

（受稿9月30日；受理10月22日）